

ナ人の友人たちと通りに立っているときに目撃した現場です。向こうから年輩のパレスチナ人がロバを引いてやってきました。老人の孫なのでしょう、三つか四つくらい小さな男の子もいっしょでした。傍らに立っていたイスラエル兵たちが唐突に老人に歩み寄り、彼の行く手を制しました。兵士のひとりがロバに近づき、その口をこじあけて言いました。「おい、お前。ロバの歯が黄ばんでるぞ。なんで白くないんだ。ちゃんと歯を磨いてやってるのか!」。老人は愚弄され、幼い少年は目に見えてうろたえていました。兵士はもう一度、質問を繰り返しました。今度は大声で老人を怒鳴りつけながら。他の兵士たちはそのようすを面白がって眺めていました。子どもは泣き始め、老人はじっと黙ったまま、そこに立ちすくんでいました。辱められながら。同じ場面が何度も繰り返し演じられるうちに、群集が集まり始めました。すると兵士は老人に、ロバの後ろに立つよう命じました。そして、ロバの尻にキスしろと言ったのです。最初、老人は拒みませんでした。けれども、兵士が老人をどやしつけ、孫がヒステリックに泣き叫ぶと、老人は身をかがめ、言われたとおりにしたのでした。兵士たちは大笑いしながら去って行きました。私たちはおし黙り、そこに立ったままでした。恥に打たれ、互いを見合うこともできませんでした。ただ、少年がやみくもにすすりなく声だけが耳に響きました。老人は眩められ、打ち砕かれて、しばらく身動きしませんでした。それは、ずいぶん長い時間であったように思われました。

私もまたその場に立ちすくんでいました。信じられない思いにただ茫然として。私がそのときただちに思い出したのは、両親が私に話してくれた逸話の数々です。一九三〇年代、ユダヤ人がまだゲットーや収容所に入れられる前、ナチスによっていかに扱われていたか。歯ブラシで歩道を磨くよう強制されたこと、公衆の面前でごひげを剃り落とされたことなど。あの老人の身に起きたことは、その原理、意図、衝撃において、それらとまったく等しいものでした。人を辱め、その人間性を剥奪すること。一九八五年の夏のあいだずっと、同じような出来事を私は繰り返し目撃しました。パレスチナ人の青年たちがイスラエル兵たちによって無理やり四つん這いにさせられ、犬のように吠えさせられたり、通りで踊らされたりする姿を。

ホロコースト・サヴァイヴァーの子どもである私はそれまでずっと、両親が耐え忍んだこと的一端でも何とか体験することはできないものかと思ってきました。彼らが語って聞かせる物語に耳を澄ましながら、私はいつも、もっと聞きたいと思っていました。私はよく自分に問いかけました。純粹な恐怖とはいったいどんな感覚なのだろう。どんなふうなものなのだろう。家族の全員を恐ろしいやり方で、それも一瞬にして失ってしまったら、生活のあり方すべてが取り返しのつかない形で消滅してしまうというのは、人間にとって何を意味するのだろうか。私は自分を彼らの立場において想像してみようと思いました。うまくいきませんでした。それは、わたしに想像できる範囲をはるかに超えた、あまりに測りがたいものでした。

占領下のパレスチナ人と生活をともにして初めて、私は、これらの問いのいくつかに対する答えの、少なくとも一部を見出しました。いえ、答えのほうが無理やり私に襲いかかってきたのです。たとえば、純粋な恐怖というものがいかなるものであるのか、私は一八歳になる友人のラビアから学びました。イスラエル兵が私たちの隠れている部屋の正面扉を壊そうとしたとき、彼女は恐怖に凍りつき、抑えがたく身を震わせながら、難民キャンプで私たちがシェアしていた部屋の真ん中に釘付けになったまま立ちすくんでいました。イスラエル人の兵士たちに向かって一瞬Vサインをしたという理由で、妊娠中の女性のお腹を彼らが殴っているそばで、どうすることもできずにいたときには、私自身恐怖で体が麻痺するのを体験しました。無許可のまま家を建てた——イスラエル当局が申請を何度も不許可にしていたためですが——という理由で、イスラエルの軍事用ブルドーザーが家とそこにあるものすべてを破壊したとき、年輩の男性が嗚咽を漏らし、女性が叫び声を上げる姿を目にして、私は喪失と追放がどういうものか、より具体的に理解することができました。

剥奪と記憶

ユダヤ人とパレスチナ人とのもつとも深い繋がりと、そしておそらくは、占領というものが意味するもののなかでもっとも痛ましい実例は、家とシェルターという概念のなかに見出すことができるのではないのでしょうか。ある家族の家が意図的に破壊される、しかも彼らにはそれを止める術もなかった黙って見ているしかない。そうした状況を端で眺めているということがいかにおぞましいことか、言葉では言い表すことができません。パレスチナ人にとってそうであるようにユダヤ人にとっても、家というものは、頭上の天井をはるかに越えたものを表しています。家とは、生それ自体を表しているのです。パレスチナ人の家屋を破壊することについて、イスラエルの歴史学者、メロン・ベンヴェニステイは次のように書いています。

土地に根ざして生きるという文化がかくも深く伝統に染み込みながら流浪を余儀なくされている個人、その民族的神話が、略奪された祖国の土地から根こそぎにされるといふ悲劇に根ざしている個人にとって、家というものがもつ象徴的価値はいくら誇張しても誇張しすぎるということはないだろう。そのような個人にとって、長男の誕生と自分の家を建てるという出来事は、時間と物理的空間の連続性を象徴するものであり、人生の中心をなす出来事である。したがって、個人の家を破壊することは、その世界を破壊するに等しいのだ。¹³

過去四二年「一九六七年の第三次中東戦争から」のあいだイスラエルによるパレスチナ占領は、

追放と離散を意味してきました。家族の分断。軍の統制によって組織的に否定される人権、市民権、法的、政治的、経済的権利。何千人もの人びとに対する拷問。何万エーカーもの土地の収用。一万八千軒以上におよぶパレスチナ人の家の破壊。パレスチナ人の土地に容赦なく拡大される不法なイスラエル人入植地。パレスチナ人の経済の切り崩しと破壊。封鎖。外出禁止。地理的な分断。人口的な孤立。

パレスチナ人に対するイスラエルの占領は、ナチスによるユダヤ人ジェノサイド（大量虐殺）と道徳的に等価であるわけではありませんし、等価である必要もありません。しかしホロコーストと占領とが大きく異なっているからといって、そのことが占領の残虐さを軽減させるわけではまったくありません。占領は、ますます破壊的なものになってきていくにもかかわらず、いまやおどましくもごく普通なことになってしまいました。占領とはひとつの民族が他の民族によって支配され、剥奪されるということです。彼らの財産が破壊され、彼らの魂が破壊されるといふことなのです。占領がその核心において目指すのは、パレスチナ人が自分たちの存在を決定する権利、自分自身の家で日常生活を送る権利を否定することで、彼らの人間性をも否定し去ることです。そして、ホロコーストと占領が道徳的に等価でもなく対称的でもないように、占領者と被占領者もまた、道徳的に等価でもなければ対称的でもありません。たとえどんなに私たちがユダヤ人が、自分たちのことを犠牲者と見なしたとしても、です。占領はホロ

コーストとは違うのだからまだ耐えられるなどと言うことは、実際多くの人がそういう発言をしてきましたが、ジャーナリストのロバート・フィスク「英誌インディペンデントの著名な中東特派員」も言うように、魂を失って地獄に向かう行為でしょう。

そして、恐ろしい忌むべき自爆行為やガザ地区からのロケットがより多くの罪なき者たちの命を奪っているのは、いまや広く忘れ去られています。まさにこの剥奪と窒息状態という状況においてなのです。入植地や、破壊された家々や、封鎖用バリケードがもとからそこに存在したわけではないのと同じように、自爆者やロケットもまた最初からそこに存在していたわけではありません。

ユダイズムの記憶は——記憶というものすべてがそうであるように——、ダイナミックであり、けっして静止したまま変わらないものではありません。そこには多元的な複数の声ははらまれ、一者が覇権を握ることを播るがします。けれども、ホロコースト以後の世界において、ユダヤ人の記憶はある決定的な点において、その確固たる力が失われてしまいました。その決定的な点とは、ユダヤ人の記憶が、パレスチナ人の被る苦難の現実と、それに対してユダヤ人が罪を負っているという現実を排除していることです。一民族として私たちは、イスラエル国家の創設をパレスチナ人の追放と結びつけることができなりました。私たちは、ユダヤ人が自分たちの場を見つけることが、同時にパレスチナ人が自分たちの場を失うことだということ